

Shoyu 勝友

勝友とは…すぐれた友。自分の徳を進める善い友

とく じょう じ
徳成寺

〒963-0112 郡山市安積町成田字成田68
TEL 024-945-2671

令和4年1月1日

新年の佛法如何と問わば 口を開いて他に説似するを須いず
露れ出ず東君の真面目 春風吹いて綻ぶ臘梅花 『大智禪師偈頌』

年の初めに、手をあわせ、幸せを祈る。
その手に、怨みつらみはないだろうか。
その祈りに、「今・ここ」への感謝の念はあるだろうか。
感謝の念、それは、すべてを肯定することからはじまると思うのです。
受け入れがたく、目を背けたくなるような「今・ここ」であったとしても、
「今・ここ」からはじめていく。「今・ここ」から逃げない。
南無帰依佛と誓ったからにはその勇気を忘れずに、
共に真実を担う人でありたいと願います。
本年が穏やかな年でありますように。

新年おめでとうとびいびいぐさます

お彼岸の中日やお盆には
お寺にお参りください。

お墓参りのあと、ご本尊様に手をあわせましょう。

ご本尊とは、本当に尊いことを
気づかせてくれる仏様のことです。

感染対策に
留意しながら、
皆さまをお迎え
いたします

十二月八日、徳成寺清月墓が完成しました



安心の永代供養墓



パンフレットがございますので、
ホームページから申し込みください。

徳成寺からのお願い

お寺にご用の際には、お越しになる前にお電話をください。

住職一人がお寺で起居しております。

葬儀や所用で留守にすることも多くありますので、

予め電話で要件をお伝えください。

令和四年 年回忌表

一周忌	令和三年	二十一回忌	平成十四年	五十一回忌	昭和四十七年
三回忌	令和二年	二十七回忌	平成八年	七十回忌	昭和二十八年
七回忌	平成二十八年	三十三回忌	平成二年	百回忌	大正十二年
十三回忌	平成二十二年	三十七回忌	昭和六十一年		
十七回忌	平成十八年	四十三回忌	昭和五十五年		

※徳成寺では二十三回忌・
五十回忌の年回忌はありません。

寄進者

金一封〈西畑〉熊田秋男 殿 金一封〈鳴神〉佐藤智彦 殿 金一封〈東京都〉山岸裕明 殿

毎年、年賀状を頂き有難うございます。誠に失礼ではありますが、この「勝友」を以てお檀家の皆様への
年賀状とさせていただきます。

後の祭り

六十歳で急逝した父の葬儀。弔辞の時、祭壇を前にして娘さんが絶叫した。

「お父さん、ごめんさい！」

嗚咽を抑えて、彼女は遺影に向

かって語り始めた。それは：中学生の頃から、父親の意見に反発する事が増え、顔を見るのも嫌になったこと。高校を卒業し、逃げるように仙台に就職したとのこと。以後、帰省はせず、父親には連絡をしなかったとのこと。訳あってシングルマザーとして出産し、子供を連れて実家に戻ったこと。再び一緒に暮らし始めても、父親を避けていたこと。

彼女は涙に声を詰まらせながら、「でも、いつか必ずお父さんとゆっく

りと話をしたり、旅行に行ったりできると思ってた。そして、ありがとう、と伝えたいと思ってた」と語り、「それができなくなって、本当にごめんさい」と頭を下げた。

吉川英治氏は「仏壇は後の祭りをするところ」と吐いた。今思えば、親の言うことを聞いとけばよかった。もう少し優しい言葉をかけておけばよかった。あそこに一緒に行っておけばよかった。そう、故人を偲ぶ時間は心が揺さぶられる時間でもある。

してしまったことはなかったことにはできない。でも、「後の祭り」ができるのは、その人が大切な人だから。

生活を切り詰めてでも

「唐突で申し訳ないですが、母の葬儀をしていただけませんか。先程、菩提寺の住職さんに枕教をお勤めいただいたのですが：許せなくて」と、電話があった。怒りを押し殺して話そうとする彼の誠実な姿に、耳を傾けた。

りません」と申し出たら、「生活を切り詰めてでも支払うものだと命じられたこと

オ、結果、金額に拘泥する住職様の姿に呆れ、菩提寺に離壇を申し出たこと

ア、昨晚、お母様が亡くなったことイ、今朝、菩提寺の住職様と通夜葬儀の日程を定め、午後枕経を勤めていただき、戒名の説明があったこと

ウ、その席で、住職様曰く、「あなたの父親の戒名は院号だから、母親もそのようにしなさい」と布施の額を告げられたこと
エ、あまりに高額だから、院号は要

お母様との別れに心を尽くして臨もうとしている彼には、とても辛い時間だったろう。弔いや供養の話ではなく、お金の話だけでは母親の人生や遺族の想いまで汚されたような気がしただろう。彼もできることなら

ば、両親の戒名を揃えたいと思っただろう。しかし、人には、そうしたくてもできない困難な時期もある。

亡くなった者は、生きている者の幸せを願っている。

住職が福島民友新聞社発行のこおりやまゆうに「仏教界隈」を不定期に連載しております

炙りだされる

立川談志師匠は、「酒が人間をダメにするのではない。人間はもともとダメだということを教えてくれるものだ」と喝破した。

五十二歳になった十一月、やっとわかったことがある。それは、「私は本当に馬鹿だった」ことだ。

正しいと思ってきたことは、実は、自分の物差しでしかなかった。優しいような態度を装って、その後の果実を期待していた。人の心に刺さる言葉を集めては、使う機会を心待ちにしていた。大切なものを手にしていたのに、もつといい事はないかと血眼になっていた。頭を剃り、袈裟を身につけても、結局、私は名利を追い求めていたのだ。

結果、多くの人を傷つけてきた。

そのことを、支えてきてくれた人が四年かけて教えてくれた。四年かけて、私の狡さを炙りだしてくれた。今は息をするのも苦しいけれども、この狡さを捨てるのが私の最期の課題だ。無常を観ずれば、名利なし。私は何もわかっていませんでした、私の心は病んでおりました、私は本当に馬鹿でした。

さあ、この身を切り刻まれたように痛みを抱いた「今・ここ」からはじめていこう。寂しさに押しつぶされそうな「私」からはじめていこう。それが、あの人への感謝と誠意だから。

令和三年 伝道掲示板

- 1月前半 生かざる いのち尊し けさの春
中村 久子
- 1月後半 勿体なや祖師は紙衣の九十年
大谷 句仏
- 2月 今さら を 今から に
- 3月 汝、ゆめ晴天の友となる勿れ、
雨天の友となれ
- 4月 気に入らぬ 風もあろうに 柳かな
- 5月 ただ過ぎに過ぐるもの、帆かけたる舟。
人の齡。春夏秋冬。『枕草子』
- 6月 雨ふるふるさとははだしで歩く 山頭火

- 7月 あめつち に われ ひとり みて たつ
ごとき この さびしさを きみ は
ほほゑむ 会津八一
- 8月 墓に布団は着せられず
- 9月 仏壇は後の祭りをするところ
吉川英治
- 10月 神は非礼を受けず
- 11月 人飲食せざるは莫し
能く味を知るもの鮮きなり 孔子
- 12月 人は乾杯するほど 幸せになれる